

Title	福沢諭吉の中津像：『福翁自伝』の記述に込められた"意図"
Sub Title	Fukuzawa Yukichi's image of Nakatsu : the purpose behind its portrayal in his autobiography
Author	堀, 和孝(Hori, Kazutaka)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2014
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.31, (2014.), p.203- 221
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20140000-0203

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢諭吉の中津像

——『福翁自伝』の記述に込められた“意図”——

堀 和 孝

はじめに

福沢諭吉の中津像と聞いて誰しもまず思い浮かべるのは、『福翁自伝』（一八九八年七月一日より一八九九年二月一六日まで『時事新報』に六十七回にわたり連載。同年六月、単行本刊行。以下、『自伝』と略称）に描かれている中津像であろう。言うまでもなく、そこでは極めて否定的な中津像が描き出されている。福沢が中津で暮らしたのは、中津藩の下級武士であった父百助の死に伴い任地の大坂から帰郷した数え年三歳のときから、蘭学修行のため長崎へ赴く二十一歳のときまでであったが、子供の遊びにまで「門閥」がついてまわることに不愉快を感じながら成長したことを赤裸々に述べ、長崎に出るときには、「故郷を去るに少しも未練はない、如斯処に誰が居るものか、一度出たらば鉄砲玉で、再び帰て来はしないぞ、今日こそ宜い心地だと独り心

で喜び、後向て唾して颯々と足早にかけ出した⁽¹⁾と記している。

『自伝』によれば、こうした中津の「門閥」に対する強い憎しみは、生後間もなく死に別れた父親とやはり若くして亡くなることとなる兄もそれに苦しめられたことよって増幅されていた。父の百助が学問で身を立てたいと思っていたにもかかわらず、下級武士であるために俗吏で一生を終わらざるを得なかったという話や、兄の三之助が家老へ宛てた手紙の上書きに「下執事」と書いたら「御取次衆」と書き直してこいと突き返されたという話を今日聞かされる読者は、福沢に同情を覚えると同時にこのような時代に生まれなくてよかったという心情にならざるをえないのである。

しかし、『自伝』が発表された当時の中津に暮らす人がその記述を読めば、おそらく福沢に対する同情よりも故郷の恥になるようなことを言つて欲しくなかったという気持ちの方を強く感じたのではないか。当時の中津に暮らす人の多くは、福沢と同じような経験をしたり見聞きしながらもその苦しみを胸にしまって生活していたわけであり、そうした人々は自分の古傷を触るようなことをして欲しくなかったとも感じたであろう。しかしながら、福沢は『自伝』のなかにあるような中津像を終始一貫して有していたわけではない。中津の人へ宛てて書かれた手紙や文書、また実際の行動の上では非常に暖かい姿勢を郷里に対して示している。だとすると、福沢はなぜ『自伝』のなかで否定的な中津像を描き出したのか、という疑問が浮上するのであるが、この疑問は、福沢が明治一〇年に中津の門閥制度を悪しき例として取り上げた「旧藩情」を執筆しながらも、生前は刊行しなかったという事実を知ることで一層深まるのである。⁽³⁾

福沢と中津の関わりに着目した評伝には横松宗『福沢論吉 中津からの出発』(一九九二)があり、また『自伝』そのものについても河北展生、佐志伝、松沢弘陽の諸氏により詳細な註釈がなされている。⁽⁴⁾しかし、

それらにおいても福沢が『自伝』のなかで否定的な中津像を強調した理由については論じられてこなかった。そこで本稿では、『自伝』が刊行された当時の福沢の時局認識と重ね合わせることににより、その点について一つの試論を提起してみたい。

一 島津祐太郎宛書簡と「中津留別の書」

それに先立ち、まず『自伝』以外の文章や行動にあらわれた福沢の中津像を確認しておくこととしよう。第一に取り上げるのは、文久二（一八六二）年四月十一日、幕府使節の一員としてロンドンに滞在していた福沢が、中津藩士島津祐太郎へ宛てて発信した書簡である。そのなかで福沢は、「富国強兵之本ハ人物を養育すること専務ニ存候」と述べ、そのためには洋学による教育が必要であると言う。なぜかといえば、福沢の見るところ、従来の漢学を基本とした教育からは実地に役立つ人材が得られなかったからである。

此まで御屋敷ニ而人物を引立にハ漢籍を読先務と致来候得共、漢籍も読様ニ而実地ニ施し用をなし不申。適例鍾太夫、桑名太夫、今泉郡司殿、此三士八年来漢書を読、実地ニ試候所、絶而用を為さず。性来謹直之者ハ僅ニ廉恥之二字ハ不忘候得共、稍や才力ある者ハ、才ニ役せられ廉恥をも忘るゝ、に至申候。左候得も富国強兵之本、人物を養育するハ、必ス漢籍を読にも在らざること、被存候。⁽⁵⁾

このような文言からは中津藩の現状を憂える福沢の姿が見て取れるが、同様の姿勢はこの書簡のなかで、

「何卒御家二而も、肥前侯に先鞭を着けられざる様、大变革之御処置有之度⁽⁶⁾」と中津藩が近隣の佐賀藩に改革の先鞭をつけられることへの懸念を表明しているところにもあらわれている。これは封建割拠の時代としては当然の配慮だったのかもしれないが、もし『自伝』のなかで言うように、福沢が「故郷を去るに少しも未練はな」という気持ちの底から感じていたならば、こうした言葉は出てこなかったに違いない。

福沢にとって万延元（一八六〇）年の渡米に続く二回目の外遊となったこのときの渡欧は、文久二年元旦に長崎を出発し、その年十二月二十日に品川に帰着するまでちょうど一年間に及ぶ大旅行となった。視察したヨーロッパの国も、フランス、イギリス、オランダ、ドイツ、ロシア、ポルトガルの六ヶ国にわたっており、それぞれの国の印象を記した「西航記」も残されている。それを繙いてみると、イギリスではたとえば聾学校に大きな印象を受けていることがわかる。

養啞院は啞子を教る学校なり。教師六、七人あり。都下の啞子百余人を集めて語学、算術、天文、地理等を教授すること尋常学校と異なるなし。其法、初て院に入る者は指を以てアベセの記号なすを教ゆ。次で唇舌齒喉の運動を見、或は之を触れ、其運動の機（に）倣ひ、声音を發することを学ばしむ。已に声音を發することを学べば、他人の言を耳に聞く能はずと雖共、唇舌齒喉の動機を見て其語を解し、共に談話するを得。一女子あり。余之に問曰、how do you do 声に応て答て曰、very well thank you 又問曰、how long have you been in this school 答曰、ten years 其敏此の如し。⁽⁷⁾（四月二十二日）

福沢はこのように聾学校での体験を生き生きと記述する一方、軍需工場については、「ウールキツチュに行

き、アルムストロン砲製作局を観る。ウールキッチュは竜動橋より十二里。朝十時旅館を出、午後四時まで局内を周視したり。此局は近来専アルムストロン砲のみを製造し、海陸軍用に供す。大砲の数七日毎に三十門を造り、三年前より持続すと云⁽⁸⁾。(五月十二日)と事実を述べるに留まっている。このことから、すでに安政五(一八五八)年から築地鉄砲洲の中津藩邸で蘭学の家塾を開いていた福沢の関心が、軍事よりも教育に向いていたことがうかがえるが、先の書簡に見られた「富国強兵之本ハ人物を養育すること専務ニ存候」という認識も、イギリスでは体の不自由な人も教育を受けられる体制ができていたことを知ったことにより一層強められたのではないか。

福沢はこのときロンドンで『英清辞書』と並んで『チェンバーズ経済書』を購入したことが知られているが、その『チェンバーズ経済書』を参考にして著されたのが『西洋事情』外篇(一八六八)であった。同書が公刊された慶應四年に、福沢は家塾を芝新銭座へ移転させ慶應義塾と命名してもいるのだが、その後学校の経営が次第に軌道に乗り始めたことから明治三(一八七〇)年の暮、中津で暮らす母親を迎えに行くため帰郷している。その際、中津の青年に与えるべく認めた「中津留別の書」の冒頭で、福沢は次のように述べている。

古来支那日本人のあまり心付ざることなれども、人間の天性に自主自由といふ道あり。一と口に自由といへば我儘のよふに聞れども、決して然らず。自由とは他人の妨を為さずして我心のまゝに事を行ふの義なり。父子、君臣、夫婦、朋友、互に相妨げずして各其持前の心を自由自在に行はれしめ、我心を以て他人の身体を制せず、各其一身の独立を為さしむるときは、人の天然持前の性は正しきゆへ、悪しき方へは赴かざるものなり⁽⁹⁾(傍点引用者、以下同じ)。

「自由」という言葉を用いていることは明らかである。⁽¹⁰⁾ 福沢によれば、古来中国や日本に希薄だったのは「自由」という観念だけではなかった。たとえば、女性を敬う心である。

人倫の大本は夫婦なり。夫婦ありて後に、親子あり、兄弟姉妹あり。天の人を生ずるや、開闢の始、一男一女なるべし。数千万年の久しきを経るも其割合は同じからざるを得ず。又男といひ女といひ、等しく天地間の一人にて軽重の別あるべき理なし。古今支那日本の風俗を見るに、一男子にて数多の婦人を妻妾にし、婦人を取扱ふこと下婢の如く又罪人の如くして、嘗てこれを恥る色なし。浅ましきことならず哉。⁽¹¹⁾

この一文を読んで戸惑いを感じる人は今日ではないだろうが、当時においては反対に少なくなかったのではないか。先ほどの引用文中に「父子、君臣、夫婦、朋友」という言葉が見られたが、この順番は封建時代における人間関係の重要性の度合いを示していたと考えられるからである。「人倫の大本は夫婦なり」という文章ほど、封建社会と近代社会の違いの本質を端的にとらえた文章もないと思われる。

続けて福沢は、社会の秩序維持のためには政府が必要であることを次のように説明する。

人の心の同じからざる、其面の相異なるが如し。世の開るに随ひ、不善の輩も随て増し、平民一人づゝの力にては、其身を安くし其身代を護るに足らず。是に於て一國衆人の名代なる者を設け、一般の便不便

を謀て政律を立て、勸善懲惡の法始て世に行はる。此名代を名づけて政府といふ。其首長を国君と云ひ、
附屬の人を官吏と云ふ。国の安全を保ち他の輕侮を防ぐためには欠くべからざるものなり。⁽¹²⁾

「二国衆人の名代」、「勸善懲惡の法」といった表現はさすがに古さを感じさせるが、政府とは人民の便宜のために設けられたものであるとする福沢の国家観は今読んでも新鮮に映る。ここに記されているような国家観がその後の日本社会に定着していれば、「官尊民卑」などという言葉も生まれなかったのではないか。現代の日本人は、かかる認識が明治初期に存在していたことに対してもう少し自覚的であつてもよいように思われる。そして最後に、福沢は学びの中心を洋学に置くべきことを説く。

方今我国に外国の交易始り、外国人の内、或は不正の輩ありて、我国を貧にし我國民を愚にし自己の利を営んとする者多し。されば今我日本人の皇學漢學など唱へ、古風を慕ひ新法を悦ばず、世界の人情世体に通ぜずして自から貧愚に陥るこそ、外国人の得意ならず哉。……願くは我旧里中津の士民も、今より活眼を開て先づ洋学に従事し、自から勞して自から食ひ、人の自由を妨げずして我自由を達し、脩徳開智、鄙吝の心を却掃し、家内安全天下富強の趣意を了解せらるべし。人誰か故郷を思はざらん、誰か旧人の幸福を祈ざる者あらん。⁽¹³⁾

以上に要点を紹介した「中津留別の書」は四千字に満たない分量ながら、そこには福沢の代名詞とも言うべき『学問のすゝめ』初編（一八七二）の骨子が姿を現しており、その意味において彼の思想のエッセンスが凝

縮された文章と言うことができる。先に見た島津宛書簡と比較すると、両者とも国家富強のための洋学教育の推進という構想では一貫しているが、見逃せないのは改革の先鞭を他藩につけられることへの懸念が後者では消えていることである。『自伝』によれば、このときの帰郷の際、福沢は再従弟で攘夷主義者の増田宋太郎から命を狙われたと言(14)うが、同時に中津で自らの理解者が増えつつあることへの手応えを感じていたことがそこから看取できるのではないか。

二 中津市学校への支援と耶馬溪競秀峰の景観保全

事実、福沢がこの帰省の際に藩の重役に行った提言に基づき、翌年には中津市学校が設立されている。この学校の学則やカリキュラムは原則としてこの年三田へ移転する慶應義塾に準じたものであり、校長の小幡篤次郎以下、中上川彦次郎、須田辰次郎、浜野定四郎など慶應義塾に学んだ中津出身者がスタッフに名を連ねていた。中津市学校は明治一六年に閉校となったが、慶應義塾の分校とも言(15)うべき学校が明治初期に所在したことは、中津における洋学熱の高さを物語るものとして特筆すべきであろう。そもそも「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」の書き出しで始まる『学問のすゝめ』初編自体、元来は中津市学校の開設に当たって中津の人々に「学問の趣意」を伝えるという目的で著されたものだったのであるが、福沢旧邸の襖の中からも次のような史料が発見されている。

一、当処え洋学御開ニ付、学校入用ハ御家録十分ノ巻カ御出方ニ可被成、旧 知事様思召候へ共、洋書御

買上ケ彼是来三月迄御入用之内、五百両丈ケ瓦解ノ御出方ニ相成候間、津田耕烟殿右高差出候様、角弁坪方被申聞、今日銀札所休日ニ付、御役所ニ有リ物之内ノ差出候。⁽¹⁶⁾

ここからは中津市学校の設立のために当初旧藩主奥平家が家禄の十分の一を提供する考えであったことが読み取れるが（実際には五分の一が提供された）、奥平家は江戸時代のうちから蘭学の振興に熱心であり、中津藩は全国のなかでも蘭学の盛んな藩の一つになっていた。三代藩主奥平昌鹿が藩医前野良沢のオランダ語学習を支援し、良沢が杉田玄白らとともに『解体新書』（一七七四）を刊行するきっかけを作っただけではなく、五代藩主奥平昌高は藩士に命じて『蘭語訳撰』（一八一〇）、『バスタード辞書』（一八二二）という二冊のオランダ語の辞書を刊行させている。⁽¹⁷⁾ そのことを思うと、「其時分（安政元年二月、長崎に出る以前のこと）を指す——引用者）には中津の藩地に横文字を読む者がいないのみならず、横文字を見たものもなかった。都会の地には洋学と云ふものは百年も前からありながら、中津は田舎の事であるから、原書は扱置き、横文字を見たことがなかった」という『自伝』の記述を無批判に受け取ることが躊躇せざるを得ないのである。⁽¹⁸⁾

中津市学校に学んだ経歴を持つ広池千九郎によると、同校の生徒数は設立の翌年に開かれた女子部も含めると明治六、七年から八、九年頃には六百人以上に達し、一時は「関西第一ノ英学校」⁽¹⁹⁾と称されるほどであったという。それではなぜ、中津市学校はその後十年余りで閉校してしまうのであろうか。従来の研究ではその理由として、一〇年二月に勃発した西南戦争の影響が指摘されている。西郷隆盛が挙兵すると中津でも増田宋太郎等が呼応して旧県庁を襲撃するという事態となり、中津市学校の教育にも多大な被害が生じたが、戦争終結後は、徴兵制度上の特典が受けられる公立学校へと生徒が流れるようになった。統計によると、中津が含まれ

る下毛郡では、公立学校の生徒数が一年に三四名であったのが一六年には一一四名へと増加しているのに対し、私立学校の生徒数は一〇年の三四四名から一六年の八〇名へと大幅に減少している⁽²⁰⁾。この数値から中津市学校の衰退ぶりは明らかであるが、同じ時期に本体の慶應義塾も学生数を大きく減少させ、一三年九月頃には福沢も廃塾の決意を一時固めたことを思えば、中津市学校が短命に終わったのも致し方なかったのかもしれない。

もともと、徳富蘇峰が一五年三月、熊本の自宅で始めた大江義塾のように、西南戦争の打撃を受けた地域においてもこの時期に新たに設立され活況を呈した私塾があったことには留意する必要がある。蘇峰は一九年末に大江義塾を閉鎖して上京したためこの学校も短命に終わったが、四年半で約二五〇名もの学生が学んでいたことが判明している。そして上京後の蘇峰が、泰西的平民社会に向かつて「社会運動ノ旗頭ニ立ツ」主体を「明治ノ青年」に求める主張を掲げて論壇に旋風を起こしたことは周知の通りである。このような事情をふまえると、明治一六年の中津市学校の閉校という事実は、新しい世代の知識人の成長に伴い福沢の人氣が相対的に低下しつつあったことを物語る出来事であったと位置づけることができるのではないだろうか⁽²³⁾。

ところで、中津市学校が閉校したのと同じ年に、市学校の資金的な後ろ盾であった天保義社で内紛が発生していたことは福沢の中津像を考える上で見逃せないところである。中津藩は天保年間から藩士の禄の一部を飢饉対策という名目で借り上げていたのであるが、廃藩置県後、その積立金を基に天保義社という士族たちの互助組織が作られ、死亡時の弔慰金の支払いや預金の受付、中津市学校への出資などといった銀行類似の業務を行っていた。しかしこの年に、貸付金の回収に苦慮したことから組織の存続と処分をめぐる対立が起こり、訴訟騒ぎとなる。その背景には、「封建制度下である程度恩恵を蒙っていた守旧的な人々が、近代的な経営のあ

り方をなかなか理解できず、近代的改革を進め、資金を有効に利用しようとする新興層の人々と対立を強めていった⁽²⁴⁾ことがあるとされる。福沢も騒動の仲裁を依頼されるが、そのためには旧藩主奥平昌邁の力を借りるほかに、中津の士族たちには依然として身分や格式の意識が色濃く残っていることを目の当たりにすることとなった。仲裁を依頼してきた元中津藩士の鈴木閒雲に宛てた書簡（明治一六年一月二日付）のなかには、「諭吉之眼中ニも中津なし。中津の士族共が何と喧嘩をするも、勝手ニ任して無頓着⁽²⁵⁾」という文言が見え、古い体質から抜けきれない中津の士族たちに嫌悪を感じている様子がうかがえる。

しかし、それでも福沢は中津との関わりを断ったわけではなかった。旧中津藩主奥平昌暢の正室である芳蓮院が明治一九年に病気で亡くなるまで慶應義塾の構内に住まわせて世話をしただけでなく、二七年二月から三月にかけて墓参のため長男と次男を伴って帰省した際、耶馬溪競秀峰が売りに出されていることを知ると、心ない者の手に渡って景観が損なわれることのないよう私財を投じて約一万平方米の土地を買い取っている⁽²⁶⁾。「自伝」のなかでは「所謂美術と云ふ思想は少しもない⁽²⁷⁾」と述べられているが、福沢にも自然の美を楽しむ精神は並みの人以上にあったのである。

おわりに

以上より、福沢が『自伝』の記述とは裏腹に中津のことを終生氣にかけていたことは明らかにされたものと思われる。「中津留別の書」の末尾に記された「人誰か故郷を思わざらん、誰か旧人の幸福を祈ざる者あらん」という言葉に嘘や偽りはなかったのだろう。だとすればなぜ、福沢は『自伝』のなかで否定的な中津像を強調

したのであろうか。

ここで想起したいのは、『自伝』が『時事新報』に連載された当時は、日清戦争に勝利したことで日本の人々が自らの国力への自信を持ち始めた時期であったということである。しかし、その若々しい自信がともするとアジアの国々に対する軽侮へと流れていったことは否めず、福沢がそうした風潮を苦々しく思っていたことは、たとえば、『自伝』の連載期間中であった明治三十一年九月二二日、『時事新報』に掲載された「支那の改革に就て」という社説が示している。そのなかで福沢は次のように述べている。「日本の進歩著しと云ふと雖も、開国以来僅々四十年の事にして、支那に比すれば単に一步を先んじて西洋文明の主義を取りたるが為に、兎に角に世界の一国として認められたるに過ぎず。又彼の戦争とても支那人の備なきに乗じたればこそ斯くの如き大捷を博したるのみ。……彼等が真実、心の底より我に親しみ、来て益を乞はんとするに当りては、飽くまでも旧来の關係を忘れずして、旧師国、旧恩人を以て之を遇し、あらん限りの力を尽して彼の求むる所に応じ、其足らざる所を助けて、幾千年來の師恩に酬い、今後互に文明の事を共にして真実兄弟国たることを期す可きのみ。他の弱味に付込み之を輕蔑するが如き、日本人の断じて為す可らざる所のものなり」と。⁽²⁸⁾また、『自伝』が一書にまとめられた翌三三年、福沢の門下生を中心に作成された「修身要領」のなかには、「地球上立国の数少なからずして各その宗教言語習俗を殊にすと雖も、其国人は等しく是れ同類の人間なれば、之と交るには苟も輕重厚薄の別ある可らず。独り自ら尊大にして他国人を蔑視するは独立自尊の旨に反するものなり」という条文が含まれているが、このことから、「他国人」に対する「蔑視」が横行していた当時の情勢を福沢等が懸念していた様子が察せられる。こうした事情を踏まえると、『自伝』のなかで明治以前の中津を否定的に描いたことには、日本社会から依然として消えない「門閥制度」の害悪を示すことで、日本人の行きすぎた自

尊心をたしなめようとする意図が込められていたのではないかと考えられるのである。⁽³⁰⁾

こうした解釈はもしかすると意外に思われるかもしれない。他ならぬ福沢自身、日清戦争に際しては主戦論者の一人であったし、『自伝』の末尾でも、「日清戦争など官民一致の勝利、愉快とも難有いとも云ひやうがない。……前に死んだ同志の朋友が不幸だ、ア、見せて遣りたいと、毎度私は泣きました」と述べているからである。しかしその直後で、「実を申せば日清戦争何でもない。唯是れ日本の外交の序開きでこそあれ、ソレホド喜ぶ訳もない」⁽³¹⁾とこうした快哉を打ち消す記述をしていることに注意する必要があるだろう。また日清戦争の帰趨が決した二八年二月四日に森村明六へ宛てて認めた手紙のなかでは、「老大国の施設、一として成るものなし。是れぞ所謂国運のひだりまへならん。敵なからも氣之毒なること二候」⁽³²⁾と敗者を労わる心情も見せている。日清戦争に際して、当時の金額にして一万円という大金を醸出しながらもこうした冷静な姿勢を保ち得たことには驚かされるが、おそらく「文明」の普遍性を信じて疑わない福沢にとって「国家」の枠は必ずしも絶対的なものではなかったのであり、そのような認識を端的に表現したものがこそ、「瘠我慢の説」の冒頭に記された「立国は私なり、公に非ざるなり」⁽³⁴⁾という言葉だったのではないか。

人類全体から見れば「私」の存在に過ぎない「国家」を維持するためには、時として「瘠我慢」の精神が求められる場合がある。旧幕臣でありながら新政府の大臣となった勝海舟や榎本武揚の行動は、日本においてそのような精神の調達源となりうる「士風」を大きく傷つけるものであり、とりわけ無抵抗で江戸を官軍に明け渡した勝の責任は大きい。このような「瘠我慢の説」の主張に対して、もし福沢が要求するように勝が江戸で官軍を迎え撃っていたら、外国の干渉を招き国家的独立を危うくしていたであろうと批判したのは蘇峰であった。その是非はともかく、今日からこの論争を見て興味深いのは、蘇峰がこうした批判を行う際、「立国は私

なり、公に非ざるなり」という福沢の立論の前提を、「立国は私なる乎、公なる乎、此の如き学者的の問題は暫らく之を避け⁽³⁵⁾」と簡単に棚上げしているところである。幕藩体制を実質的に経験していない蘇峰の目には、「立国は私なり、公に非ざるなり」という言葉は机上の空論としか映らなかつたのであろうが、実在する国家を相対化してとらえる視点を欠いた民権論者が、状況次第では政治権力の御用記者へと転落する危険性を秘めていることは、日清戦争以降の彼自身の足跡が物語っている。それでは私たちは今日、「立国は私なり、公に非ざるなり」という福沢の認識をどれだけ内面化することができているであろうか。現代の日本人が福沢の思想に学ぶべきものは少なくないように思われる。

注

- (1) 福沢諭吉『福翁自伝』(時事新報社、一八九九年)、慶應義塾編『福沢諭吉全集』第七卷(岩波書店、一九五九年) 一一二頁。
- (2) 同上書、二〇頁。
- (3) 福沢は、浜野定四郎(当時中津市学校校長)に宛てた書簡(明治一〇年六月六日付)のなかで、「此小冊子(旧藩情―引用者)ヲ出版シテ学校ノ必用ナルヲ知ラシメントモ存候得共、中津士族ノ考ニ、斯ル旧惡弊ノ有様ヲ態々世ノ中ノ耳目ニ触ルハ、事実トハ申ナガラ些ト不外聞ナド、思フ者ハ有之間舖哉。小生モ人ノ嫌フコトヲ無理ニ犯ス積モナシ」(慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第二卷(岩波書店、二〇〇一年)一八頁)と述べている。この言葉から推して考えれば、『自伝』では中津の士族に嫌われることを覚悟の上で、門閥制度の実態を語っていたことになる。
- (4) 横松宗『福沢諭吉 中津からの出発』(朝日新聞社、一九九二年)、河北展生・佐志伝編著『福翁自伝』の研究(慶應義塾大学出版会、二〇〇六年)、松沢弘陽校注『福沢諭吉集 新 日本古典文学大系明治編10』(岩波書店、二

- 〇一一年)。
- (5) 島津祐太郎宛福沢諭吉書簡(文久二年四月二日付)、慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第一卷(岩波書店、二〇〇一年)一四頁。
- (6) 同上書、一三頁。
- (7) 福沢諭吉「西航記」文久二年四月二十二日の条、慶應義塾編『福沢諭吉全集』第一九卷(岩波書店、一九六二年)三〇頁。
- (8) 同上、文久二年五月十二日の条、同上書、三三頁。
- (9) 福沢諭吉「中津留別の書」(明治三年一月二七日)、慶應義塾編『福沢諭吉全集』第二〇卷(岩波書店、一九六三年)四九―五〇頁。
- (10) 福沢が freedom、liberty の訳語として「自由」という言葉を使用した例は、『西洋事情』初編(一八六六)卷之一に見える。そのなかの「文明の政治」について解説した箇所、福沢は、「本文、自主任意、自由の字は、我儘放盪にて国法をも恐れずとの義に非らず。総て其国に居り人と交て気兼ね遠慮なく自力丈け存分のことをなすべしとの趣意なり。英語に之を「フリーダム」又は「リベルチ」と云ふ。未だ的当の訳字あらず」と注記しており、それから四年後に刊行された『西洋事情』二編(一八七〇)卷之一の「例言」のなかでも、「訳書中に往々自由原語「リベルチ」通義「イト」の字を用ひたること多しと雖ども、実は是等の訳字を以て原意を尽すに足らず」(慶應義塾編『福沢諭吉全集』第一卷(岩波書店、一九五八年)二九〇、四八六頁)と記している。このように翻訳者自身によって必ずしも適切とは考えられていなかった「自由」という言葉が後世まで残った理由について、柳文章氏は「異質な素姓の、異質な意味のことば」である「翻訳語」には必ずどこか分らないところがあり、そういう言葉は逆に分らないままであった方が良かったからではないか、と指摘している(『翻訳語成立事情』(岩波書店、一九八二年)一八六―一八七頁)。
- (11) 前掲、福沢「中津留別の書」、前掲、慶應義塾編『福沢諭吉全集』第二〇卷、五〇頁。

- (12) 同上書、五二頁。
- (13) 同上書、五三頁。
- (14) 前掲、福沢『福翁自伝』、前掲、慶應義塾編『福沢諭吉全集』第七卷、一七九頁。
- (15) 慶應義塾編『福沢諭吉全集』第三卷（岩波書店、一九五九年）二九、三五頁。付言すれば、『学問のすゝめ』九編（一八七四年五月）と十編（一八七四年六月）もそれぞれ、「学問の旨を二様に記して中津の旧友に贈る文」、「前編の続、中津の旧友に贈る」と題されている。
- (16) 中津市歴史民俗資料館所蔵福沢旧居襖下張文書一―一六。この他に福沢旧居の襖からいかなる史料が発見されているかについては、『中津アーカイブズ講座 活動報告書Ⅰ』（中津市教育委員会、二〇一四年三月）を参照。
- (17) ここで名を挙げた人々の略歴は、ヴォルフガング・ミヒェル・鳥井裕美子・川眞真人編『九州の蘭学』（思文閣出版、二〇〇九年）にまとめられている。
- (18) 前掲、福沢『福翁自伝』、前掲、慶應義塾編『福沢諭吉全集』第七卷、二一―二二頁。福沢が江戸で蘭学の教授を始めたのは『解体新書』の翻訳が行われた中津藩中屋敷であったので、『自伝』の執筆時点で中津における蘭学の伝統について知らなかったということは考えられない。また前掲、河北・佐志編『福翁自伝』の研究』においても、中津藩庁に出勤する兄の三之助はかなり正確な洋学の知識を得ることができたはずであること、中津医師団の一人であった従兄弟の藤本元岱からある程度の蘭学の知識が伝えられた可能性のあることが指摘されている（註釈編、一九頁）。
- (19) 広池千九郎編『復刻 中津歴史』下（防長史料出版社、一九七六年、原著一八九一年）三〇七頁。
- (20) 西沢直子「中津市学校に関する考察」、『近代日本研究』一六（慶應義塾福沢研究センター、二〇〇〇年三月）七九―八〇頁。このほか中津市学校を取り上げた論文に、木村政伸「中津市学校にみる明治初期洋学校の地域社会における歴史的役割」、『日本教育史研究』第九号（日本教育史研究会、一九九〇年）所収、がある。

- (21) 慶應義塾への入学者数は明治四年には三七七名であったが、以後次第に減少し一〇年には一〇五名まで下がった。その後再び増加したものの、三〇〇人台に回復するのは一四年(三四四名)である。なお一二年までの入学者の大部分は士族であったが、一三年以降は平民が半ば以上を占めるようになった(西川俊作「明治十年後における慶應義塾の財政難―その数量的分析―」、前掲、『近代日本研究』一六、一六五―一六八頁)。
- (22) 徳富猪一郎『新日本の青年』(集成社、一八八七年)、植手通有『明治文学全集34 徳富蘇峰集』(筑摩書房、一九七四年)一一八頁。丸山真男は、当時の蘇峰の議論が有した画期性について、「彼の所論の特徴は、天保の老人というなかに朝・野をともに入れていくことです。一方で、伊藤博文や山県有朋など維新の元勳の貴族的欧化主義や復古主義を排するとともに、他方で、自由民権派を「封建的自由主義」ときめつけ、また福沢を偏知的(つまり道德軽視的)と批判しました。日本における「世代論」の最初の登場です」(『文明論之概略』を読む)上(岩波書店、一九八六年)三三―三四頁)と指摘している。
- (23) ちなみに、花立三郎『大江義塾』(ぺりかん社、一九八二年)に掲げられた塾生氏名(二五二―二五四頁)と慶應義塾福沢研究センター編『慶應義塾入社帳』索引(慶應義塾、一九八六年)を比較対照すると、大江義塾から慶應義塾へ進んだ者には、宮城康喜、元山総作、百嶋万記、糸永吳、井上翁介、金子佐平、篠原多一郎、平田友吉、深水未、松下為敬、松本(中尾)鹿次郎、毛利次宗、山村捨二(弍)の一三名がいたことがわかる。この数は大江義塾から同志社への進学者数一〇名を上回っているが、大江義塾から東京専門学校への進学者数一九名には及んでいない。
- (24) 西沢直子「福沢諭吉の士族観」、小室正紀編著『近代日本と福沢諭吉』(慶應義塾大学出版会、二〇一三年)四〇―四二頁。
- (25) 鈴木間雲宛福沢諭吉書簡(一八八三年一月二日付)、慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第四卷(岩波書店、二〇〇一年)二八頁。
- (26) この渓谷はもともと「山国の谷」と呼ばれていたが、文政元(一八一八)年、頼山陽がこの地を遊歴して「耶馬溪

山天下無」と詠じてから耶馬溪と呼ばれるようになった(平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系第四五巻 大分県の地名』(平凡社、一九九五年)三七頁)。

(27) 前掲、福沢『福翁自伝』、前掲、慶應義塾編『福沢諭吉全集』第七巻、一四頁。

(28) 福沢諭吉「支那の改革に就て」、『時事新報』一八九八年九月二日、慶應義塾編『福沢諭吉全集』第一六巻(岩波書店、一九六一年)四八〇頁。この社説に見られるような福沢の東洋連帯論的側面は、たとえば竹越与三郎の対外認識と比較すると一層明らかになるだろう。参照、拙稿「竹越与三郎の中国・朝鮮観に関する一考察―福沢諭吉との比較において―」、『近代日本研究』第二七巻(慶應義塾福沢研究センター、二〇一二年二月)所収。

(29) 「修身要領」(一九〇〇年)、慶應義塾編『福沢諭吉全集』第二巻(岩波書店、一九六四年)三五五頁。

(30) その点で、『福翁自伝』は、明らかに自分の生涯を成功とみとめ、時代と自己との間に、ほとんど申分のない諧和が成り立つことを信じて疑わなかった人物の物した自伝である(佐伯彰一『日本人の自伝』(講談社、一九九一年)一〇六頁)とする理解には同意することができない。

(31) 前掲、福沢『福翁自伝』、前掲、慶應義塾編『福沢諭吉全集』第七巻、二五九頁。

(32) 森村明六宛福沢諭吉書簡(一九九五年二月四日付)、慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第八巻(岩波書店、二〇〇二年)二七頁。

(33) 明治二七年七月の日清戦争開戦に際し、福沢は軍資金を国民の醸金によって一挙に賄うことを計画し、「報国会」を結成して民間の富豪や華族らに大口の募金を要請するとともに、『時事新報』誌上においても「表誠義金」と称して一〇銭以上でだれでも参加できる募金運動を展開した。福沢がこのような運動を行った根底には、政府の主導ではなく国民が主体的に国事に参加することが重要であるとする考えがあった。しかしこうした動きは政府によって好まれない、政府は自ら利子付きで資金を還付する軍事公債の募集を行ったため「表誠義金」の集まりは停滞、そのテコ入れとして福沢は八月一四日付で「表誠義金」に一万円を醸金した。「表誠義金」の最終的な金額は約五万円、それに

対し政府の軍事公債は一億二千万円近くに上った（福沢諭吉事典編集委員会編『福沢諭吉事典』（慶應義塾、二〇一〇年）二三四～二三五頁）。

(34) 福沢諭吉「瘠我慢の説」、『時事新報』一九〇一年一月一日、三日（一八九一年一月二七日脱稿）、慶應義塾編

『福沢諭吉全集』第六卷（岩波書店、一九五九年）五五九頁。

(35) 徳富猪一郎「瘠我慢の説を読む」、『国民新聞』一九〇一年一月二三日、草野茂松・並木仙太郎編『蘇峰文選』（民友社、一九一五年）五三二頁。なお、この文章は萩原延壽・藤田省三『瘠我慢の精神』（朝日新聞出版、二〇〇八年）にも収められている。

※本稿は、平成二六年三月二二日、経済学会・慶應義塾経済学者人物データベース (Biographical Database of Keio Economists: BDKE) 作業部会・福沢研究センターの共催で行われた報告会「慶應義塾の経済学者——その水脈と群像」における発表の内容を文章化したものである。関係者並びに当日ご参加いただいた方々に深くお礼を申し上げます。